

韓国巫俗における憑依

福留, 範昭
広島修道大学人文学部 : 助教授

<https://doi.org/10.15017/2244061>

出版情報 : 九州人類学会報. 17, pp.113-117, 1989-10-23. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :



韓国巫俗における憑依

福 留 範 昭

シベリアの北方諸民族のシャーマニズムでは、脱魂 (soul-loss) 現象が強く見られるのに対して、韓国の巫俗では、脱魂現象はほとんど見られず、巫は専ら憑依 (possession) によって、精霊や神格と交通する。死や病気を始めとする不幸の原因は雑鬼 (chapkwí) と呼ばれる悪霊の憑依によるものとされる。そして、不幸への対応としてなされる巫俗儀礼の対抗手段の中心は、巫の憑依である。本稿では、この憑依現象を通して韓国巫俗を概観したい。

巫俗と靈魂観

憑依は、精霊や神霊といった霊的存在の作用であるが、なにが、どのように作用するかは、その社会の靈魂観や他界観などの一連の霊的存在に関する観念や信仰に影響されている。最初に、韓国における靈魂観から見てみよう。

韓国では、人の靈魂を表す言葉として、魂魄 (honbek) がある。魂魄の魂 (hon) は、人が死ぬとあの世に行き、魄 (pek) は死体とともにこの世に残るとされる。魂魄の観念は儒教思想とともに中国からもたされたものであるが、一般には普及していない。通例、人の靈魂は魂 (hon) もしくは固有語でノク (nok) と呼ばれる。人が死ぬと、この靈魂は肉体を抜け出し、あの世に行くと考えられている。韓国語で「亡くなった」という言葉は通例、トラガショッタ (帰られた) と表現される。死んで、靈魂があの世に帰ると考えられているのである。あの世は、通例北の天空にあるとされる⁽¹⁾。人が死ぬとすぐ、遺族が死者の衣服を持って、屋根に上がり、北の空に向かって、衣服を振りながら、死者の名を大声で叫び靈魂を呼び戻す招魂儀礼が広く見られる。

しかし、人は死後すぐにあの世に行くのではなく、2～3年間は現世近くに留まっていると信じられている。それは、あの世への道程が遠く、山あり川ありで険しいからであるとされている。そして、一方で満2年間の服喪の間は靈魂が家に留まり、大祥 (tesang) という儀礼の後、初めて靈魂があの世に行くという信念と関係している。この服喪期間とその後の死者の祭祀は、もっぱら儒教儀礼によってなされる。

韓国の「冠婚喪祭」と呼ばれる通過儀礼は、儒教によって強く色づけられている。冠婚喪祭の中で、今日最も儒礼に忠実に広く行われているのが、葬送儀礼である喪礼と祖先祭祀儀礼である祭礼である。祭礼には、一般に高祖以下の4代祖を家で祀る忌祭祀 (kijesa) と、5代祖以上を墓地で祀る時祭 (sije) の2種がある⁽²⁾。忌祭祀は父母、祖父母、曾祖父母、高祖父母のそれぞれの命日に毎年行われる。一方、時祭では始祖以下の一族の祖先が合祀される。したがって、忌祭祀で祀られる神格は個性をもつ具体的な祖先であるのに対し、時祭では祖先全体が祀られ、始祖や名声を得た者を別として、祖先は個性を失い、一般的な祖先神として祀られる。忌祭祀と時祭という儒教の祭祀で祭られる祖先は、子孫を守護しその繁栄を願う存在であるが、儀礼の反対給付として日常生活の細かな問題にわたって対応してくれる存在ではない。位牌は通例、常時住居に安置されることはなく、祭祀に際して用意される。祭祀は「孝」の具体的表現であって、祖先に飲食を捧げてもてなすものであり、祖先に対

して具体的な祈願をするといったことはない。

儒教の祖先祭祀は専ら男性によって催されるが、伝統的社会では、家々で様々な神が主婦の手で祀られてきた。例えば慶尚北道の北部地方では、祖霊を祀る壺、家宅神としてのソングジュ壺、台所のチョワン（竈王）、地神のトジュ、出産の神である産神などである。これらは、産神を除き、家々に常時安置され、家屋や家族を守護する神格である。主婦は年に1～2度、巫を呼び、これら家神を祀り家内繁盛や家族の無病息災を祈願する儀礼を行う。祖霊はこれらの家神の中核をなす存在で、祖霊をまつる壺には秋に収穫した新米が入れられている。祖先壺に祀られる祖先は、この家の祖先全体である。また、この地方には、祖先タンシギと呼ばれる柳で編んだ蓋つきの籠を家に数個祀っている地域がある。この籠には父母、祖父母、曾祖父母など比較的近親の祖霊が個別に安置されている。祖先壺や祖先籠には、農漁業の収穫期には収穫者が供えられる。そして、家族に何か問題が生じた場合には、主婦がこの祖霊に手を合わせ、祈願する。このように、巫俗の祖霊をはじめとする家神は、家と家族を守護し、具体的な家族の要求に対応してくれる神格である。

祖先壺に祀られる祖先は、その家のあらゆる祖霊であるのに対して、儒教祭祀で祀られる対象は一定の資格をもった祖先のみである。その資格とは、生前と死後を通じて、定められた通過儀礼を経ていなければならないというものである。冠礼以前（16～17歳）の年令で死んだ者、未婚の者、既婚でも男子を生まなかった者、正当な葬儀を受けなかった者、これらはいずれも祖先になることができない。結婚し、祭祀を行ってくれる男子を生み、死んで喪礼を経た者だけが祀られる。死者の霊は服喪期間の喪礼を経て、長期の忌祭祀を受け、更に時祭を受けることによって祖先として神格化すると考えられることができる。

儒教の祖先崇拝は「怪力乱神を語らず」という朱子学思想に基づき、合理的・形式的であり宗教性に乏しい。それは、孝の具体的表現としての儀礼を強調し、他界観・靈魂観をふくむ宗教的世界観を十分に展開していない。これを補っているのが、土着の民間信仰であり、その中核となっている巫俗信仰である。

巫俗は、儒教祭祀が対象にしない死霊を祀る。未婚の青年の霊や溺死・戦死・横死・自殺などの「異常な」死に方をした者の霊は、冤魂となりあの世に行けず、この世近くをさまよい、家族を始め人々に危害を加える存在となる。このような霊は、巫覡を呼び儀礼を行って、慰撫し浄化し、あの世に送ってやらなければならない。このような儒教祭祀では祀られない死霊は、その後も巫俗儀礼では崇拝の対象となる。また、巫俗では、戦いで憤死した将軍や非業の死を遂げた少女などが神格として祀られている⁽³⁾。

	こ の 世	死	あ の 世
誕 生	(冠礼) → (婚礼) → × → × →	〔喪礼〕 → 祖霊 → 死霊 → 雑鬼	〔祭礼〕 → 祖先 巫 神

図Ⅰ 祖先と死霊

図Ⅰは、儒教祭祀を経た死者の神格化と、祭祀を受けることができず祖先になれない死霊の神格化の過程を図示したものである。人々に病気や死などの不幸をもたらす雑鬼と呼ばれる存在の大部分は、前述した「異常死」の死霊が神格化（精霊化）したものである。非業の死を遂げた者の死霊は、この世に執念を持ち、怨みを抱いており、生者に危害を与えるとされる。巫俗では、このような死霊に儀礼を行うことによって、死霊を慰めあの世に送り、危害を防止しようとする。あの世に行けない死霊は、雑鬼（悪霊）となり、あの世とこの世の間をさまよう。なかでも未婚の死者の霊は、この世に大きな未練を残すために、極めて危険だと考えられている。未婚の死者の場合には、霊魂をあの世に送る儀礼をした後に、更に、異性の未婚の死者を見つけて、巫による死後結婚の儀礼がよくなされる。このような処置をなさないと、青年の霊魂はモンダル鬼神、娘の霊魂は孫閣氏と呼ばれる悪霊となり、一層危険な存在となる。この他にも、雑鬼の中には、死者の性質や死に方に応じて、固有の名と性格を持つものがある。例えば、水鬼〔溺死〕、ヨンサン〔横死〕、マルミョン〔巫の霊〕などが、そうである。

巫俗では、病気・事故・不和などの不幸のほとんどが、死霊や雑鬼あるいは他の神格が憑依することによってもたらされると解釈される。巫覡の最初の仕事は、クライアントに憑依しているのが、どのような存在なのかを占うことから始まる。そして、不幸の原因となった存在が明らかになると、それを祓穢するための儀礼がなされる。巫覡のこの儀礼の中心もまた憑依によって占められている。

巫覡と憑依

韓国には多くの種類の巫覡が存在しており、その名称も地域ごとに多様である。これらを大きく分けると、クッとと呼ばれる伝統的で形式化された巫歌、神話、舞踊などを伴う巫祭を行う巫堂（mudang）と、卜占を主業とする存在になる。巫堂には、中部以北の万神（mansin）、南部地方のタンゴル、済州地方の神房（simbang）などの地方類型がある。このうち、入巫過程や儀礼において憑依によるトランスを体験するのは万神である。タンゴルと神房は世襲巫であり、巫病体験をもたず、儀礼においては祭司的性格が強い。卜占者の中で、占匠（chomjengi）と一般に呼ばれる類型は、巫病によって入信し、儀礼において神懸かる。

万神や占匠は、入巫過程で食欲不振、不眠、身体衰弱などの身体異常や幻覚、幻聴、夢などの精神的徴候を示す。このような徴候は、医学的治療では直すことができず、巫覡に依頼するしか方法はないと考えられている。巫覡は、卜占によって、これら徴候が、將軍とか七星などの巫神や祖先神あるいは雑鬼の憑依によるものと判断し、多くの場合、入巫によって憑依した神格を祀ることを勧める。この場合、入巫の儀礼を行わなければ、神霊の罰によって病気が重くなり、最後には死に至ると言われている。入巫儀礼では神母（師の巫）が、雑鬼を祓穢し、神霊を降ろし慰撫し、更に入巫者にこれを憑依させその守護霊とする、入巫儀礼やのちの修行過程をとおして、守護霊を始めとする神霊の憑依は制御されたものとなる。

これらの巫のなす儀礼は憑依の信念と技術に基づくものである。巫は占いによって、クライアントに憑いている神霊を特定する。この占いは、しばしば、巫自身にその守護霊を憑依させ、守護霊が託宣を語るという形でなされる。クライアントに憑依している悪霊が、威力のよわい雑鬼などの場合には、その雑鬼を巫の憑依霊によって、脅し追い出す祓穢儀礼（pudakkori）がなされる。憑依してい

るのが力の強い雑鬼や神格の場合、クッと呼ばれる大規模な儀礼がなされる。クッは、普通十数個の祭次からなり、各祭次ではそれぞれ異なる巫神が祀られる（図Ⅱは、ソウル地方のクッで祀られる神格の一部を挙げたものである）。巫はそれぞれの祭次で、自らに祭神を憑依させ歌舞賽神し、託宣をなす。託宣は一人称でなされるが、クライアントの祖霊を自分もしくはクライアントに憑依させ死に口を行うこともよくある。クッでは巫はこのように、巫神を総動員して、憑霊と歌舞賽神によって、クライアントについての悪霊を慰撫し、出て行くことを懇願する。

タンゴルと神房の世襲巫は神懸かりの状態になることはないが、憑依技術を用いないわけではない。東海岸のタンゴルは、部落祭の初めに村落の守護神を住民の持った竹に憑依させるし、神房はクッの一祭次である十王祭（siwanmaji）でクライアントの祖霊の死に口を行う。彼らはクッで祭神を降臨させ、自ら神を演じる。ただし、神託はほとんどの場合3人称で語る。

巫俗と現代

クッには、家の神々を祀り家内の繁栄や無病息災を祈る安宅クッ、治病や危機的問題解決の為に言う憂患クッ、死霊をあのに送る死霊クッ、そして部落祭である別神クッなどがある。部落祭はもちろん他のどのクッも、家族や親族だけでなく近隣の者が集まり、祝祭的雰囲気の中で行われる。それは、巫の歌舞賽神や憑依による託宣が極めて演劇的になされるという理由だけでなく、巫俗が男女、血縁、地縁のいずれにも開放的な性格を持っていることによって。これは、儒教の祭祀が、専ら男性だけで行われ、しかも父系血縁集団に限定されているのと対照的である。巫俗の神格に関する知識は、地域の住民に共有されている。巫俗で祀られる祖先には、父方だけでなく、母方そして妻方の祖先も含まれている。そして、巫俗儀礼のきっかけを作る神霊に対する知識もまた地域住民に共有されており、それが特定の家の死霊であっても、村落の住民にも危害を与える可能性を持っている。巫俗は、このように村落の地縁的社会関係に強く根ざした宗教現象である。

しかしながら、巫俗を取り巻く環境は近年激しく変化してきている。産業化にともなって、農村部から多くの人口が都市に流出し、農村の生活様式が近代化するにつれて、村落で共有されていた信念の体系や社会関係が大きな変化を被っている。このような背景にあって、巫俗もまた変化を余儀なくされている。

巫覡も農村部から都市に集中するようになっている。伝統的な村落共同体の崩壊や家族の核化にと

神 名			(神の性格)
帝	釈	chesok	(天神、命福神)
天	王	chonwang	(天神)
大	監	tegam	(地神)
成	造	songju	(家宅神)
軍	雄	kunung	(將軍神)
倡	婦	changbu	(巫祖神)
山	ヌラ	sanmanura	(山神)
龍	王	yongwang	(龍神)
別	相	byolsang	(天然痘神)
万	明	malmyong	(巫の霊)
靈	山	yongsan	(横死者の霊)

図Ⅱ ソウル地方の巫神

もなって、安宅クッや死霊クッは減少し、巫への依頼は個人的な問題解決の為の、憂患クッに集中するようになってきている。また現在、巫俗式の部落祭を行っているのは東海岸の漁村地域だけである。多くの都市ではクッを、騒音防止の名で山間部や海岸の指定地域でのみ許可するようになっている。

巫も世襲巫は急速に減少している。降神巫は伝統的な巫歌、巫舞、神話などを伝承する巫堂が少なくなり、いわゆるソン巫堂（未熟な巫堂）や占匠が増加している。これは、人々の巫に対する期待と一致している。巫に民衆が求めているのは、巫俗の伝統的な体系ではなく、カリスマ性であり、それを具現する有能な憑依の技術であると思われる。

このように、巫俗はかなりの変化に見舞われているが、その基礎になる靈魂観は民衆に保持されており、憑依に対する信頼も薄れていない。これは、最近の聖霊主義的なキリスト教の急速な布教の拡大の基礎にもなっている。

〔注〕

- (1) あの世を北方の天空であるとする観念が最も一般的であるが、仏教の西方浄土の影響で西方にあるという観念も一部に見られる。また、済州島の神房の伝承する神話には、海の彼方にあの世があるという水平的世界観も見られる。
- (2) 最近では、忌祭祀を3代祖に限り、4代祖から時祭祀に移行する事例が増えている。いずれにしても、儒教祭祀は、一定の父系親族を単位として営まれており、その中心となる宗家・宗孫を核として父系親族集団を組織化し維持していく機能を果たしている。
- (3) 將軍神で有名なものに、高麗末に李成桂と争って敗れた、崔瑩將軍がある。この將軍神は京畿地方では山神と見なされている。処女神としては、親への孝行の為に肖らの命を絶った沈清が有名である。

参 考 文 献

- | | | |
|-------|------|---|
| 崔 吉 城 | 1984 | 『韓国 of シャーマニズム』 弘文堂 |
| | 1986 | 『韓国 의 祖上崇拜』 여 전社 ソウル |
| 金 泰 坤 | 1978 | 「韓国巫俗の神観」 桜井徳太郎編『シャーマニズムの世界』 春秋社 |
| 李 光 奎 | 1977 | 「親族集团 과 祖上崇拜」 『韓国文化人類学 第9輯』 韓国文化人類学会 |
| 秋 葉 隆 | 1950 | 『朝鮮巫俗の現地研究』 養徳社 |
| 竹 田 旦 | 1981 | 「韓国における他界観について」 元興寺文化財研究所編『東アジアにおける民俗と宗教』 吉川弘文館 |
| | 1983 | 『木の雁 韓国の人と家』 サイエンス社 |